In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『落花飛鳥』におけるティエール像
Author	中島, 廣子
Citation	人文研究. 42 巻 2 号, p.69-86.
Issue Date	1990
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部
第 42 巻　第2分冊1990年　21～38

『落花飛鳥』におけるティエール像

中　島　廣　子

I

前回は *Le Crépuscule des Dieux*『神々の黄昏』において Napoléon Ⅲ ナポレオン三世がいかなる描かれ方をしているかについてふれたが，今回はその政治的ライヴァルであった Louis-Adolphe Thiers ルイ＝アドルフ・ティエールの登場する *Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent*『落花飛鳥』をとりあげ，これらふたつの小説の根底にひそむ作者の歴史観と，両作品の分かちがたい関連性について述べてみたいと思う。

この小説の筋書きについてはすでに前々回述べたとおりであり，省略することとするが，問題の人物ティエールを描写した場面は，第一部の第二の書，すなわちパリ・コミューン最後の壮絶な闘いと炎上する首都の光景を迫力ある筆致で描いた第一の書に続く箇所においてである。1871 年 5 月末，「コミューン敗退ののち，血塗られたパリの街は瓦礫の山と化し，なおもくすぶり続けた」(p.43)，そんな混乱した状況下，普仏戦争の敗戦処理のため超人的な活躍ぶりを示したのが，行政長官に任ぜられていた老ティエールであった。その高名な歴史学者のもとに，戦乱で負傷し捕虜となった主人公の青年 Floris フロリス（実はロシア大公の長子）の探索と助命嘆願依頼のため，ロシア宮廷の高官 Vassili Manès ヴァシーリイ・マーネスが，つてを頼りに訪れるという設定となっている。

1797 年に南仏マルセイユに生まれたティエールには，あわや私生児となるべき運命を，父親の正妻の死によって，ぎりぎりのところで免れたという，きわどい出生のいきさつがある。父親はマルセイユの名士の家の出ながら，生来の遊び人で，警察に追われるようなことも度々であったらしく，アドルフ誕生の後も，母子を置き去りにしても平然としていたような人物だったらしい。いっぽう母方は，大革命の露と消えた詩人，アンドレ・シェニエとは

縁続きで，ティエールはほとんどこの母方の女性たちにかこまれて成長したようである。もうすでにこの時点で，ティエールとナポレオン三世には，なにやら奇妙な共通点がうかがえる。すなわちナポレオン三世も両親が不仲で，恋多き女性であった母 la Reine Hortense オルタンスの女王には華やかな噂が絶えず，本当にオランダ王の子供であるかどうかは皇室内でも疑わしいこととされ，おもてだって王に祝辞を述べることすらさし控えられたとかいう。それに，父王は儀礼どおりに祝砲をうたせることを拒み，子供の洗礼式にも立ち合おうとしなかったらしい。したがってナポレオン三世も私生児に近い冷たい扱いを父から受け，母とその取り巻きという女所帯の中で育っているからである。[1] おまけに彼は，異父弟 Morny モルニー公という純然たる母の私生児の助力をえて，51 年のクーデターを決行することとなる。まさに双方とも，みごと役者がそろっていたというところか。

ところでティエールは，奨学金を受けマルセイユの高校で学んだのち，同じ南仏エクス＝アン＝プロヴァンスの大学で法学を修め，さらにジャーナリストをめざし，大志を抱いて 1821 年に友人とパリに上京。その六週間後には，最初の寄稿文が運よく《Le Constitutionnel（コンスティテューショネル紙）》上に掲載され，わずか二十四歳にして，シャトーブリアンやラマルチーヌらと並んで名前の載る身となったのである。そのうえ 1823 年には，ヨーロッパの政界で暗躍した大物外交官のタレーランと出合い，好運にもその引き立てにより，三十そこそこで名士の列に加わることが出来，1830 年の七月革命ではルイ＝フィリップの擁立に貢献し，以後，政界でもめざましい活躍ぶりをみせ，二度も首相を務めるにいたる。またそのかたわら，歴史学者としても大著をものし，アカデミー会員に選出され，まさに「すえは博士か大臣か」という立身出世の物語を地でゆく経歴の持ち主であり，バルザックの小説の登場人物で，パリでの成功を夢見て「パリと俺の一騎打ちだ」と叫ぶ南仏出身の貧乏青年，ウージェーヌ・ド・ラスチニャックのモデルであるとも言われている。[2]

II

Bourges ブールジュの小説中では，ロシア生理学界の権威で宮廷侍医のマーネスが，旧知の間柄のフランス・アカデミー会員 Olympe Gigot オランプ・ジゴの橋渡しで，時の行政長官ティエールに面会にゆく筋立てとなって

いる。ただし正確にいうと，小説冒頭の「プロローグ」において，ヴァシーリイ・マーネスの兄弟Ivanイヴァンが，主人公の探索のためティエールに嘆願書を送り，それに対するティエール自身のコメントが，メモの形で原註として添えられていることを断っておかねばなるまい。

さて，ティエールの腹心の友とされるこのジゴなる人物の口調からして，すでに，当の行政長官との会見がそうあっさりと核心にせまれるわけでないことを十分予感させるところがある。なにしろジゴ氏は，「ギリシャ語や梵語および古代関係の碩学で，同時に批評もやれば作家でもあり，翻訳や注釈も手がけるかたわら教壇にたち，学士院会員にして，碑文・文芸アカデミーの終身書記長などを務める要人であり (…) アルベルトゥス・マグヌスの注釈者」(pp.42-43)，として名高い老学者なのである。

「貴簡を拝見し，直ちにこういう手を打つべきかと考えましたのじゃ。(そもそも，お尋ねの御当人が捕虜になっておいでか否かを，まずもって確認するのが妥当でありましょうゆえ）打つべき手は，その青年に関する情報と特徴をもれなく記した文書を作成することなり，と。すなわち，ティエール氏が各裁判所ならびに司法警察文書課に非公式に伝達する類の文書であります」

(…)

「手応えはいまだありませぬ。有り体に申して，貴殿の同情すべき被保護者に関して，依然，何らの足跡も手がかりもつかめぬ点，認めるにやぶさかでなく…それにまた逆の場合のほうが，むしろ意外なはずでありますからな。なにしろ書類にしても三万通も出されておるわけで，どこからどう手をつけるべきかという状態で，まさにこれカファルナウムのごとき雑然たる有様にて… (…) いや，文字通り波瀾万丈の大悲劇とでも申すべきか…若君がのう…それも御実子ともあろうお方が…いやはや！ヘラクレスは，獅子と名のりて暮らしたり…」等々と吟じてみせ，「ああ，偉大なるかな，かの老コルネイユ！」(p.43)，

といった具合で，かんじんの話題はどこへやらということになり，一向，話がすすまないのである。そして，ようやく主人公の居所をつきとめ，マーネスにその吉報を伝える際にも，ギリシャ・ラテンの故事・銘句をやたらと引用し，さらにフランスの一地方のただの島の名前を告げるのにも，「ピエー

ル・モワーヌ島でありましたのじゃ…いや，まこと，いちど聞けば忘れえぬ名前にして，ペトルス・モナクス，またピエール・ル・モワーヌ，あるいはペトラ・モナキなどとも申せましょうや」(p.44)，と博学ぶりをひけらかす。こんな人物の親友であり，学芸の分野のみならず，政治の実権をも握った男ともなれば，面会ひとつにしても，相当の覚悟を要することは想像に難くない。

なお，ここで注意すべきことは，『神々の黄昏』中でも，ナポレオン三世とCharles d'Este カール・デステ大公の会見の場に，やはり同じようにアカデミー会員で Babinet バビネという実在の科学者を同席させていた事実である。その場面での学者の存在は，皇帝にとって，宮廷に文化的彩りを添えてくれる「付属的装飾品」のごときものであったはずである。しかしながら，『落花飛鳥』では，もはやそれしきの引き立て役には甘んじてはおらず，すでに一国の長と対等の存在としておかれていることである。さりげない形ながら，こうした類似の場面をそれぞれの小説に挿入することにより，時代の推移とそれに伴う社会のあり方の相違を，否応無しに読者に悟らせる仕掛けがほどこされているのである。

Ⅲ

さて，そんなジゴ氏に伴われて，マーネスがヴェルサイユの知事公邸に行政長官を訪ねていったのは，日曜日の二時であった。祖国の非常時とあって，休戦と講和のため，高齢にもかかわらず，日に二十時間は公務にたずさわるという，文字通り寝食を忘れての奮闘ぶりをみせていたティエール氏は，連日，朝の四時には起き，夜明け早々から引見を行い，自分のために密偵としてたち働く警官らからの報告を受け，五時には伝令文に署名をすませ，六時以降は大臣や官僚や外交官とか将軍らとの打ち合せをすませ，十一時からは日曜を除いて毎日，閣議を開き，午後一時よりの昼食にも何人かの陪食者を招き，その前後にも何人もの人間との接見をこなし，さらに二時から議会におもむき，公開会議や委員会に出席し，夜は夜で晩餐に続くサロンでの接見など，明けても暮れても，きっちりと決まったスケジュールをこなしていたというから，まさに超人的という形容に値しよう。[3] したがって，小説中のこの箇所の面会時間ひとつとってみても，きわめてリアリティーを感じさせるものであり，しかもわざわざ日曜日としたことで，議会は開かれてはいな

かったろうが，週日と変わらず執務を行なっている長官の多忙ぶりをうかがわせるには，じつに効果的な設定の仕方であったということになろう。さらに，「Jules Simon ジュール・シモンおよび Gaveau ガヴォー，Marty マルティ両軍法会議委員らとこもりきりで，いよいよ裁判に駆けられるコミューン指導者に関する膨大な書類を，彼らは自分流にそれぞれ行政長官に読み聞かせていたのだ」(pp.44-5) という一文に，いかにも切迫した当時の状況が伝わるようにという，作者の意図が読み取れよう。

そして，いささか待たされ，接見用の部屋に招き入れられた二人の前に，いよいよ問題の人物，ティエール氏が姿をみせる。十九世紀のこの時期の新聞や雑誌の風刺画の材料として，ナポレオン三世以上にひんぱんにとりあげられた彼であるが，写真を見ても戯画化された絵に劣らぬほど特徴のある，芝居かお伽噺にでも出てきそうな，個性的というのを通り越した，きわめて変わった容姿の持ち主であったことがわかる。

> ほどなく扉があいて，しわのよった小人みたいな人物が戸口に現われた。顔は鬼婆，頭はキューピーそのままで，低い鉤鼻に眼鏡をかけている。まさしくアドルフ・ティエール氏そのひとであった。(p.45)

身長わずか１メートル55センチで，「フランス一(いち)の小男」，「小型(ポケット・サイズの)代議士」などと若い頃からからかわれ，両眼鏡をかけっぱなしにしているのは野暮とされた当時としてはめずらしく[4]，どの肖像画や写真でも常に眼鏡をはずさず，およそ粋とはいいがたい姿形から，後にコミューン弾圧の怨念もあってか《nain grotesque (醜い小人)》と罵られたティエールであった。Princesse Mathilde マチルド皇女など，彼のことを《petit》という形容詞づくしでこきおろし，「おつむのてっぺんにかきあげた可愛い前髪 (Petit touper) といい，ちっちゃな鉤鼻 (petit nez crochu) といい，ちっちゃな眼鏡 (petites lunettes) から，小さいくせ鋭く甲高い声 (petites voix flûtée) や，小柄な背丈 (petite taille) にいたるまで，あの元首相ときたら，お偉方 (grand homme) にしちゃあ，ずいぶんとおチビさん (petit) だことね」[5] と散々な言い方をしているほどである。ナポレオン三世がぼうっと薄目をあけたような，はっきりした印象を残さないタイプの顔かたちの持ち主であったのに比べ，一目見れば二度と忘れぬほど，まことに対照的なイメージの人物ではなかろうか。

ともあれ，オランプ・ジゴがマーネスを行政長官に紹介し，いよいよ三者による会談の場面がそれに続くが，ジゴの社交辞令をまじえたおだてにのったティエールは，この会見の本来の目的の何たるかなどどこへやら，待っていたとばかり滔々と自説をぶちあげる。

「まあ，こう言っては何だが，正規軍が勝利をうる結果に終わったのは，いささかは当方のつたなき技量と労作と知恵に頼るところあり，と考えられましょうか。だが，よろしいかな，一国の長ともなればその政治形態がたとえ貴族体制であろうと，議会制をとっていようと，はたまた臨時政府であれ，共和制であれ，オランダ式の総監統治形式であれ，そのいかんを問わず，市民に選択されたる統治方式に従い…さよう，何よりも主権を有する国民によって選択されたるものならば…ええと，何の話だったかね…ジゴ君，何か言おうとしてたんだが…」(p.45)

といった具合に，自己の政治信念を述べたてる。ところで彼の主義主張は，1830年の革命の前に《le National（ナショナル）》紙に掲載した記事の基本理念，「王は君臨すれども統治せず」として，あまりにも有名である。[6]それを旗印にシャルル十世を玉座より追い，ルイ＝フィリップを王位につけたものの，次第に意のままにならなくなったこの王に対して，二月革命の際には極めて冷たい現実主義的立場をとっている。その帰結として生じた体制の変化についても，本来，オルレアン派寄りの王党派でありながら，「あらゆる政体のうちで，我々の意見を分裂させることが一番少なかろうから」という理由で第二共和制を選び，約二十年後のこの時期にも同じ理由から第三共和制を選んだとされている。[7] したがって，《possibiliste》，《révolutionnaire modéré》，《révolutionnaire qui n'aime pas la Révolution》などという評価を受け，また自らも第三共和制大統領の地位につきながら，「私はいわゆる共和国体制を実践するところの王党主義者と呼ばれる者」だと述べているように，保守的でありながら柔軟に時代の動きに反応している。そんな彼の政治姿勢が，みごと上に引用したせりふに凝縮されていはしまいか。[8]それにしても，何とまたくどい，もってまわった口調であろう。彼がいかに多弁であったかは，様々な研究書のいずれにも欠かさず記されていることで，聞き手に言葉を尽くして説明せんとするあまり，教師が生徒を教えさとすといった物の言い方をするのが常であったとある。たとえば，ある本にはこんなエピ

ソードが紹介されている。すなわち，「諸君，イギリスでは」と言いかけておいて，「ご承知のように，それは島国でありまして…」などと，つまらぬことにまで蘊蓄をかたむけたがる癖があったようである[9]。批評家の Sainte-Beuve サント＝ブーヴによれば，

ティエールは，何でもよく知っていて，何でも話題にのせ，何でもはっきりさせたがる。彼はライン河のどの方面から，次の偉大な人物が生まれるかという話をするかと思えば，同時に，大砲には釘が何本打ってあるかというような話をするだろう。だが，こういうところが彼の欠点だともいえるのだ。[10]

とにかく雄弁なうえ，「話の途中で次々とありとあらゆる種類の別の話を割り込ませ，まさかと思うようなとんでもない方向へ，しかも，この上もなく長々と脱線してしまう」[11]というティエールの話ぶりが，小説のこの部分でも，もうすでに手にとるように描かれているのである。

そして，いよいよ三者の会談が本題に入り，主人公の青年貴族釈放の問題が話し合われることになるが，このことに関しても，そうした彼の語り口を彷彿とさせる言い回しが見出される。

「さて，ここで重大問題が残っておりまして，つまりは今回とるべき措置の形式そのものについてであります。まったく任意に法的確認を行なわせるのか，我が内閣において閣議決定にもちこむのか，それとも，いっそのことこちらのほうがより望ましいのでありますが，単なる赦免で控訴棄却決定が出されるか…ま，当面する問題には，この三通りの解決法が存在することをご考慮願いたいわけでありまして」

「ああ，さすが君だ！」と，オランプ・ジゴが感心してみせた。「どんな言葉のはしばしにも，紛うかたなきフランス精神の神髄たる，あの的確性，あの明晰さ，あの完璧なる思考のつながりがうかがいとれるではないか！」(p.48)

こうした会話は，公的な議会での演説にとどまらず，自邸のサロンでのくつろつだ集まりにおいても同様で，まさに時と所をかまわずといった様子であったらしい。ところでティエールは，話し方という面ひとつとってみても，

政治的ライヴァルのナポレオン三世とは対照的だったのではないだろうか。常に一方が具体性を重んじ，自らの見解を滔々と述べようとするのに対し，他方はそれを極力さけ曖昧にしておいて，相手の出かたをうかがわんとするところがある。ただし，さすがのティエールとても，決定的に重要な事柄ともなれば事情は異なるようである。そうした時態には，タレイラン仕込みのしたたかぶりを発揮し，政局の真の動向を見極めるまでは動こうとしない。こんな彼の性格の反映は，小説冒頭の「イヴァン・マーネスの手記」に付された，ティエールのメモの形をとった原註の部分にもよく表わされている。

守秘義務こそ国政にたずさわる者について離れぬ宿命である。そうした者の英知の集積が，偉大であっても多彩であっても，結局のところ，適当に謎で己れの身をつつんでおくことが出来てこそ，生きてくるものであり，それは欧州諸国の会議においても，国会の討議の場でも言えることなのである。(p.9)

ともあれ，異常なまでの執拗さの点においては，いずれ劣らぬものがあり，なればこそ両者ともに，失墜や亡命など失意の時期を幾度もくぐりぬけながら，ついに十九世紀のフランス社会において，名実ともに，その頂点を極めるチャンスを摑みえたのだろう。

IV

さて，何事によらず貪欲なまでの好奇心を示したティエールは，政治家としてのみならず，歴史家としても大きな業績を残している。全十巻に及ぶ《*Histoire de la Révolution française*（フランス革命史）》(1823－27) を著し，1833年にはノディエを尻目に，いち早くフランス・アカデミーの会員に選出され，さらには延々十九巻にわたる大著，《*Histoire du Consulat et de l'Empire*（執政政府ならびに帝政時代史）》(1845－62) をも上梓している。しかも，そうした著作によって大金を手にするようになった歴史家としては，フランスでは彼が初めてのケースであったという。[12] 「コンスティテューショネル紙」寄稿のエピソードをはじめ，30年の革命の発火点となった「ナショナル紙」の一件といい，この事実といい，出版業界を足掛かりにして世に打って出ては，利益をつかむ彼の経歴こそ，バルザック以上に十九

世紀という時代の申し子であったといえよう。ともあれ，小説中に挿入された行政長官のロシア大公フョードルへの大仰な表敬の言葉など，かれの大著の一説をしのばせるところがあり，André Lebois ははっきりとそれのパロディーであるとしている。[13]つまり，

「またフョードル大公はと申せば，あの歴戦の闘士，あの軍人としてならしたお方の雄々しさと堂々たる武勲のことは，識らぬ者とてありますまい。なにしろ，強国ロシアが赫々たる戦果をあげた例の一連の戦いで，不滅の栄誉をかち得られたのでありますからな ... かつまた深慮に富んだ政治家であられ，行政手腕にかけても練達ぶりを発揮され ... コーカサスの山々にこだまする如く，ファーシスとオクソスの岸辺では，その栄光ある御名が，ことあるごとに引き合いに出されたものでありました」(p.47)

といった調子である。

また，好奇心の強い彼はそれだけにとどまらず，学生時代にあまり縁のなかった理科系の学問にも後に目覚め，第二帝政期には代数学の手ほどきをうけたり，パリ天文台で星の観察を行なったり，パストゥールの実験を見学しノートをとったりもした。[14]こうした点でも，ナポレオン三世と共通したところがある。ナポレオン三世もまた前回ふれたように，歴史学の研究を趣味とし，科学の実験を自ら行なうほどであった。これは彼らに限らず，実証主義の時代といわれるこの時期の特徴的な側面かもしれないし，歴史学に関してもギゾーなどの例にもみられるように，政治家が歴史家を兼ねることは珍しくなかったわけで，文献学が発達していった時代の風潮の一端を表す現象なのであろうか。

とにかく，ナポレオン三世ですら《historien national de la France(フランスの国民的歴史家) 》と持ち上げてみせたティエールの研究の対象が，あくまでも現代史であったことも興味深い。ことに，「いかに人民を統治するか」という問題に関心を示していた彼は，それをナポレオン一世の生きざまからも学ぼうとしたようである。ところが，あまりののめりこみように，メッテルニヒから，《Napoléon civil (ナポレオンを文官にしたような男) 》とあだ名を進呈される有様で，すっかりナポレオン気取りのところがあったらしい。[15]したがって作中でも，自らの政治的手腕をほめあげる友人のオランプ・ジゴにむかって，こんな仕草をしてみせる。

「いやだねえ，オランプ君！…いつもそうやって，ひとをおだてるんだから！…」と言うと，その政治家は思い切り背伸びをし，ナポレオンの真似をして，友人の耳をひっぱった。(p.46)

そういえばナポレオン一世も，ティエールほどではないにしろ，紛れもない小男であったし，互いに南の人間であったわけで，むしろ甥のナポレオン三世より気質的には近かったのかもしれぬ。おまけに，ティエールが首相になった1836年に，ナポレオンの布告によって起工したパリのエトワール広場の凱旋門が完成し，この「王位簒奪者」を記念する式典をとり仕切ることに心中複雑なる思いであったルイ＝フィリップより，一切をまかされたのが他ならぬティエールなのであった。さらに1840年には二度目に首相の座についたが，この年，セント＝ヘレナ島よりのナポレオンの遺骸帰還問題が解決するはこびとなったのであり，ボナパルトの一家とは因縁浅からぬものがあったことになろう。

V

ナポレオン三世がパリの整備と美化に努めたことは有名だが，ティエールも公共土木事業相在任当時，パリ市中の様々なモニュメントの建設にかかわっている。たとえば，先にあげた凱旋門はじめ，マドレーヌ寺院やオルセー宮やパンテオンなどがあげられ，ことに個人的にはマドレーヌ寺院の装飾にまで采配をふるった模様である。[16]なにぶんにも，若い頃から「コンスティテューショネル紙」に「美術展」の批評を連載しており，アングルやドラクロワらの友人でもあったのだから。だが，その美的感性たるや，なかなかのもので，ことに「複製マニヤ」だったらしく，アングルにラファエロのフレスコ画の模写を依頼したりしている。[17]こうした逸話があればこそ，小説の問題の箇所で，ヴェルサイユの県庁の接見室控えの間の内装の描写ひとつとっても，いかに辛辣な書き方がなされているかが分かろうというものである。

（ジゴとマーネスの）二人の学者はしばらく待つと，受付に名前を書き取らせティエールに伝えさせていたおかげで，隣の接見室に招じ入れられ

た。そこは親しい客人用にあててある部屋で，黄色地の緞子浮かし模様の壁布が張られており，ラファエロのフレスコ画を模写したつまらぬ水彩画がかけてあった。(p.45)

ここのくだりについては Dreyfus が，「エレミール・ブールジュが，コミューンの勝者ティエール氏を忘れがたいほど誇張たっぷりに描写すべく，特に選んだ背景」であると評している。[18] 1872 年に閣議を行なったおりの写真が残されているが，その会議用の長テーブルの背後の壁にも，名画「最後の晩餐」などの複製とおぼしき絵がかけられているのが認められる。イタリアはじめヨーロッパの各地に度々足を運んだティエールは，パリ・コミューンのおり取り壊しの憂き目にあったサン＝ジョルジュ広場の自邸に，旅の土産の様々な美術品のコレクションを秘蔵していたという。その彼の書斎の絵を見ても，ぐるりと壁にめぐらした低い書棚の上には，あまたの古代風彫刻やトロフィーのごときものがあるかと思えば，東洋風の陶磁器もあり，ルネッサンス風の絵画がいくつも飾られており，天球儀のようなものも見当る。[19] さらに，日本の掛け軸なども好んだようで，まさに時代や様式は言うにおよばず，本物も複製もとり混ぜて一緒にしても平気だったようで，ナポレオン三世とは趣味の点でもよい勝負だったのではなかろうか。そして，このサン＝ジョルジュの自邸へは，1848 年の革命後，いまだルイ＝ナポレオンであった皇帝自身も招待され，晩餐の席に連なる仲でもあったのだ。

この皇帝の「成り上がり」ぶりもさることながら，ティエールにも常に《parvenu》という一語がついてまわっている。なにしろ，ヴェルサイユで執務に励む日々にも，早朝の四時から、まずは厩を訪れるのを日課にしていたり，県庁の公舎では一国の長にふさわしい生活もままならないため，ヴェルサイユ宮殿に移り住みたいとほのめかしたりしたこともあったらしいが，「一介のブルジョワが太陽王の椅子におさまる」などということは国民感情が許さなかったという。[20] とにかく平民出身の身でありながら，ルイ＝フィリップの時代より，フランス王家とハプスブルク家との縁組をもくろんで奔走したり，オルレアン公とマチルド皇女の結婚話をジェローム王にもちかけようとしたり，ヨーロッパ列強の王侯らの動きにも敏感に反応している。1852 年から 1863 年にかけては，研究三昧の生活を送りつつ，あちこちと旅をしながら，各地の社交界にもまめに顔出ししており，ことに普仏戦争敗北の後，それを頼りに勢力的に欧州各国に助力を求めて回ったことは有名であ

る。[21]したがって作中でマーネスが，主人公のフロリスの母 Maria-Pia マリア＝ピア大公妃より，彼女の長子釈放のため遣わされた旨を告げるや，

この言葉に，ティエール氏は勢いよく椅子から立ち上がると，大公妃のご希望にお答えできるなら望外の幸せ，と慇懃に誓ってみせた。ほかでもない，久しい以前より崇拝申し上げる妃殿下の御ためとあらば，と。

「初めてお目どおり願ったのは，さよう！1860年にウィーンでフェルディナント大公が催された華やかな祝宴の最中のこと。格別のご好意により謁見の光栄に浴したのであります。大公妃は，あまたの王女公妃に取り巻かれておいでで，オーストリア各地の美女の群れ集うさまは，ただもう感嘆するばかりでありました。なかでも大公妃は当時三十五才近いお年にもかかわらず，ひと際あでやかさを誇られ，そのお姿を拝見しただけで，かくも高貴なお生れにあらずとも，お美しさのみで必ずやそこまで登りつめられるはずと，思わずにはいられぬほどでありました。(p.47)

と盛んに賛辞をおくってみせるあたりは，ビスマルク相手の交渉に臨んで，ロシアの援護射撃を喉から手が出るほど欲している行政長官の胸中を，読者に想像させるに十分であろう。しかも，高貴な身分の人間に対する，「成り上がり」特有のしゃちほこばったところが，巧みに表現されてもいる。こうして，ついに一介の《plébien》が，王侯中の王侯，絶対専制君主たるロシア大公家より嘆願される身となりえたのである。わずかその四十年前には，かのスタンダールが，王政復古の反動的社会に挑んで敗れた《plébien révolté》をヒーローとして，おのが作品中に登場させていたというのにである。

かくして，宿敵ナポレオン三世のあとをうけた彼は，もはやかつてのように己れの上に王をいただくわけでもなく，ようやく名実ともにフランス社会の頂点にたち，「共和制の王」，「ちびの王さま」などと揶揄のこもった名称をおくられる身分となり，辣腕で知られたあのビスマルクからも，「アドルフ一世」という皮肉をこめた呼び方をされるにいたったのである。

VI

それにしても，ナポレオン三世とティエールというこの二人の異色の政治家は，何という不思議な因縁につきまとわれてきていることだろう。前回ふれたように，1836年と1840年の二度にわたり，ルイ＝ナポレオンは帝位奪還をめざして王政転覆をはかったものの，あっけなく挫折している。彼が二度目の騒動を起こした時，政権をになっていたのがほかならぬティエールであった。事前に察知し手を回したティエールが，ルイ＝ナポレオンを逮捕させ，Ham アムの城塞に幽閉させたにもかかわらず，この「王位簒奪者」の甥は石工に変装し，バダンゲと名乗って脱獄したいきさつがある。そんなことがあったのに，ルイ＝フィリップ失脚後の大統領選挙の際には，ティエールはこの男を支持する側にまわっている。[22]にもかかわらず，51年のクーデターでは，今度は自分が逮捕される立場となり，Mazas マザスの監獄に収監され，ついで皮肉にも例のアムの城塞へと移送され，[23]祖国追放の処分をうける結果となった。その後，ティエールが63年に政界に復帰して七年がたち，普仏戦争の危機が勃発し，開戦へと世論がわいた中で，ナポレオン三世はめずらしくこれに消極的であった。が結局，周囲に押し切られ，ティエールひとり積極的に戦争反対を説いたおかげで，皇帝がプロイセン側の捕虜になったあとは，再びこの老政治家の出番となった。[24]片や中年になって，まさかと思う幸運に恵まれ栄華を享受しえたものの，人生の黄昏で進むべき道が狂ってしまい，いま一歩のところで転落して果てる。そして，もう一方は，あわや二度とトップに返りざくこともかなわぬかと思いきや，運命のいたずらで最後のひと花を咲かせることが出来たのである。小説中の行政長官のせりふに，

「今日(こんにち)どこぞの歴史学派に祭り上げられておるタレイランにしても，一般に考えられているほどの大きな役割を果たしたわけのものでもなく，その才能とても好機に恵まれたなればこそ発揮しえた事実を，証明してご覧に入れましょうものを」(p.48)

というところがあるが，いかにも様々な危機をくぐり抜けてきた老人の自負心を忍ばせる言葉である。H. Lefèvre の言に従えば，「彼は大革命や第一帝政時代の戦争を無駄に研究したのではなかった。チエール氏には戦術と戦略があったのだ。(…) 用いる手段については，彼はいかなる躊躇もしない。チエール氏，これこそブルジョワ国家のあらゆる手段を身につけた，資本主

義社会におけるマキアヴェリスムの権化である」ということになろう。[25]とにかく，両者ともにパリという世界での《étranger》であり，むしろ「コスモポリタン」とか「ヨーロッパ人」といわれながら，一方が最後にはフランスのナショナリズムのゆえに失墜し，残る一方がその愛国主義のゆえに生き残ったことになる。[26]そして，かつてルイ＝ナポレオンがそこでクーデターを企てたあのエリゼ宮を，我が物とする日がめぐってきたという次第である。[27]しかも，ナポレオンが形ばかりとはいえ，いまだ帝政や皇位というデコレーションで粉飾せねばならない時代に君臨していたのに比べ，ティエールにはもはやそうした飾りも称号も必要としない，ただの《Monsieur》の王として臨むのである。[28]これこそ文字どおり，新たな時代の到来を意味する象徴的な出来事ではなかったか。しかも，そのためには，パリ・コミューンにおいて「人民」を弾圧し，「人民の血」を流すという代償を要したのであり，非情な歴史のパラドックスに支えられたのも事実だった。そしてこの小説は，「共和制の王」の出現したこうした歴史的背景をバックに，パリ・コミューンの闘士であった一青年が最も強固な専制主義のロシア大公の地位につくという，この上もなく皮肉で逆説的なストーリーの展開を見せる。

「あちこちの君主が玉座を追われ，囚われの身になるところを，我々はまのあたりにしてきたものですが，この青年は幸運にも，その囚われの身から玉座にのぼりつこうとしているのですな。つまりはお伽噺かなんぞのように，いっきに皇帝の従弟という親王の身分におさまり，大公の称号をうけるのでありますから」(p.48)

以上，今回まで三回にわたり，エレミール・ブールジュの代表的作品二作をとりあげ論じてきたが，世紀末に書かれたこれらの小説においては，輝かしい伝統と純血を誇る「神々」の末裔たるドイツ大公と，「成り上がりの」皇帝ナポレオン三世，さらには「王」でも「皇帝」でもない《Monsieur》のティエールという登場人物が配されていた。そこで，それらの人物像の描写のあり方を比較検討することによって，十九世紀という時代がいかなるものであったかという，作者の冷徹で確かな歴史観が浮かび上がってきたかと思う。Maxime du Camp は言う，「帝政の失墜こそ，十七世紀なら王位継承戦と呼ばれたかもしれないものに，ピリオドを打つこととなったのだ」，と。そして，「我が国においては，持続しつづけるものとて何ひとつなく，昨日の偶

像が明日のいけにえとなり，カピトリウムの丘がいつのまにか姿を変え阿鼻叫喚の石段と化し，過去はいかなる教訓ももたらすことなく，未来とて何らの展望も示しえない」とも述べている。[29]実際，この小説の中でも，青年大公として領地のひとつに居を構えた主人公の身辺にも，様々な悲劇が次々ともちあがり，絶対王政の崩壊の兆しを思わせる暗いかげが忍び寄る。そこで，そうした旧体制を捨て，世界一周の旅に出たフロリスが最後にたどりついたのが，いまだ揺るぎない専制支配を誇るアラブ世界であった。メッカとメディナに近い港町ジェッダにあって，大公とその忠臣マーネスが，はるかヨーロッパの社会をふりかえり，ことにフランス大革命よりはや百年を経，幾多の政変や革命に彩られたその歴史をかえりみて，こう結ぶのである。

「王権の失墜が迫っているとでも？共和政体の到来とでも言われるか？ふふん，共和制であれ王政であれ，役どころは違っても芝居は同じ … (…) やはり，真の君主，人民の不滅の暴君は，(…)『資本』と『国家』なのであります。(…) 事実，これら不公平の巨人を誰が倒せるものでしょうか？(…) 暴政に圧迫され，踏みつけられ，痛めつけられながら，社会主義者や共産主義者や集産主義者といった下層民らの使徒，来るべき時代の見者がこぞって求めるものは，まだもっと冷酷な暴君であります。なぜなら，それは特定の個人を越えたものであり，絶対王政国家，福祉国家，多くの目をもったアルギュスのごとき監視国家，公共の幸福につながる偉大な工業国家といったものだからです。(…) たとえ，利己主義という旧人類が刈り取られ，完全な異変ののち，ドラゴンの歯からおびただしい新人類がこぼれ出してきたとしても，それらの人間が神話どおりに闘えば，畝の外に出て戦列が乱れたとたん，そのうちのある者が，残りの者を指揮し命令するにいたりましょう。平等が人間精神の理想であっても，不平等が人間の心の性向であるかぎりは，平等の夢など，ただの夢物語，世界というものは力のうえに成り立っているのですからな」(pp.342-342)

クリミア戦争や普墺・普仏の両戦争を体験し，イタリア独立など，ヨーロッパにおける「国家」という概念が大きく変貌しゆくところに立ち会い，かつ自国の内乱を目撃した世紀末の人間にとって，行く末に確固たるヴィジョンも描けないまま，目前の繁栄に束の間の刺激を求めざるをえなかったのが実態であろうが，そんな彼らの存在が何によってたつものなのかを，当

時の読者らに容赦なく問いなおさせる要素がこれらの小説の根底にはあるのである。

使用テキスト－Élémir Bourges: *Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent*, Mercure de France 1964.
ただし，Les Éditions G. Crès 1921. 版をも参照。

注

(1) Stéfane-Pol: *La Jeunesse de Napoléon* Ⅲ, Librairie générale G. Orobitg et Cie., (出版年記載なし), pp.4-14.
Georges Roux: *Napoléon* Ⅲ, Flammarion 1969, pp.17-23.
なお Charles Léger: *Madame Récamier, la Reine Hortanse et Quelques autres*, Mercure de France 1941, Chapitre X のタイトルが《Le Second Empire, Beau temps des Batards》となっていたり，
Taxile Delord: *Histoire illustrée du Second Empire*, Librairie Germer Baillière et Cie.,(出版年記載なし),Tome I-Chapitre IV のタイトルにいたっては，ずばり《Louis-Napoléon Bonaparte est-il fils du Rois Louis ?》とつけられている。
また Thiers 関係の文献でも，J.Lucas-Dubreton: *Aspects de Monsieur Thiers*, Fayard, 1948 は第一章の出だしから，いきなり《Bâtar ? Bas, bas ? (…)》という文章から書き始めている。

(2) Charles Pomaret: *Monsieur Thiers et son Siècle*, Gallimard 1948, p.20.
Robert Christophe: *Le Siècle de Monsieur Thiers*, Librairie Perrin, 1966, Chapitre Ier のタイトルは《A nous deux, Paris !》となっている。

(3) Maurice Reclus: *L'Avènement de la 3ème Répubique 1871-1875*, Hachette 1930, pp.94-5.

(4) R. Christophe 前出著作 p.137.

(5) Paul de Rémusat: *A. Thiers*, Hachette 1889, p.59.

(6) M. Alexandre Laya: *M. A. Thiers*, Les Éditeurs Furne et Paulin 1846, Tome I, pp.65-69.　(7) Pomaret 前出著作 p.201.

(8) 大佛次郎著『パリ燃ゆ』(朝日新聞社－大佛次郎ノンフィクション文庫) 第二巻 p.38. には，「時に依ってカメレオンのように色を変えたが，元来王党派で，王政が不可能になっても政権には強い執着をもっている」とある。

(9) Robert Dreyfus: *Monsieur Thiers contre l'Empire, la Guerre, la Commune 1869-1871*, Bernart Grasset 1928, p.14.

(10) Sainte-Beuve: *Notes et Pensées* Tom XI, p. 481.

(11) Ch. Pomaret 前出著作 p.62.

(12) Ibid., p.78. なお，R. Christophe は《*La Révolution française*》の収入だけで 57000fr. (1966 年当時のフランスの通貨に換算して約 228000N.F.) にのぼったとしるしている。(前出著作 p.39)

(13) André Lebois: *Les Tendances du Symbolisme à travers l'OEvre d'Élémir Bourges*, L'Amitié par le livre/Le Cercle du livre 1952, p.97.

(14) P. de Rémusat 前出著作 pp.126-7, Ch. Pomaret 前出著作 p.122, R. Dreyfus 前出著作 pp.139-40.

(15) Ch. Pomaret 前出著作 p.25.　R. Christophe は当時の世評のひとつとして《Ce petit homme me rappelle pourtant la manière, le geste et la vivacité de paroles de l'Empereur … les jours où il n'était pas raisonnable.》というナポレオン麾下の軍人の言葉をひいている。(前出著作 p.169)

(16) Ch. Pomaret 前出著作 p.81. (17) Ibid.　(18) R. Dreyfus 前出著作 p.305.

(19) M. A. Laya 前出著作 Tome II の口絵参照。P. de Rémusat 前出著作 pp.211-2.

(20) R. Christophe 前出著作 pp.403-4.

(21) *Notes et Souvenirs de M. Thiers 1870－1873* (publiés par Mlle Dosne) 1901. 参照

(22) François Doat: *Histoire de France à travers les Journaux du temps passé de Napoléon III à l'Affaire Dreyfus 1851-1898*, L'Arbre verdoyant 1988, p.8.「憲法改正を阻止せんとして，ルイ＝ナポレオンの後押しをするティエール」の戯画がある。

(23) Horace de Viel-Castel: *Mémoires du comte H. De Viel-Castel sur le Règne de Napoléon III*, Guy le Prat 1942, Tome I p.103. に，テイエールが収容されたのは，かつてルイ＝ナポレオンが入れられていた部屋だったというデマまでとんだと記されてある。

(24) Paul M. Bouju et Henri Dubois: *La Troisième République*, Que sais-je ? (P.U.F.) 1952,《Plus que jamais, l'homme nécessaire était M. Thiers.》(p.11)
Jacques Bainville: *La Troisième République 1870－1935*, Les Grands Études historiques 1935, ≪ (…) Adolphe Thiers devenu le héros d'une sorte de plébiscite. Il était le prophète qui avait eu raison (…). ≫ (p.24)
Raymond Recouly: *La Troisième République*, Hachette 1927, ≪Il est pareil au bon vin qui s'améliore en veillissant. ≫ (p.22)

(25) Henri Lefèvre: *La Proclamation de la Commune*, 1965.「パリ・コミューン」(河野健二・柴田朝子訳，岩波書店 1968) pp.600-602.

(26) Maxime du Camp: *Souvenirs d'un demi-siècle*, Hachette 1949, Tome II p.121. 《Dès lors, la guerre cessait d'être politique; elle devenait nationale; (—)》.

(27) Paul Claretie: *Histoire de la Révolution de 1870-71*, Publication de la Librairie illustrée (発行年記載なし) Tome II, p.233. 《L'Élysée habité un moment par M. Thiers — Le salon d'argent dit du Coup-d'Etat. (sic.)》という解説が挿し絵にそえてある。

(28) J. Lucas-Dubreton p.341. 《lorsqu'on se moque de Monsieur Thiers, ainsi appelé parce que 〈ce nom de monosyllabique est trop bref pour emplir la bouche〉 とある。

(29) Maxime du Camp 前出著作 Tome II p.121, Tome I p.102.